

ノンヴァーバルコミュニケーション

松井 とし

子うさぎルンルンとのコミュニケーションの始まりはこんなことだった。

鼻のところをなでてやると、「ありがとう」とでもいうように、私の手の甲を小さな舌でペロペロとなめる。そしてまた、自分の頭を私の手の下にすべりこませる。まるで「もっとなでて」と言わんばかりに……。

長生きしたおばあさんうさぎが静かに息を引き取ってから一年近く、私たちはうさぎを飼わなかった。何か物足りないような、寂しさはあったが、日曜日や長い休みには気が楽だった。モルモットや小鳥は、子どもたちが家庭にもち返って世話をしてくれたので「環境の変化に弱い小さな生き物に、いつもと異なる環境を耐えさせている」といった後ろめたさを感じることなしに過ごすことが出来たせいだろうか。

そんな秋のある日、地域の方から「うさぎの赤ちゃんを飼って貰えないだろうか」とい

う電話があり、かわいいパンダうさぎ二匹が幼稚園にやってきた。こうして、手の平に乗るほどに小さなうさぎたちとの日々が始まった。名前はルンルンとミーミ。おばあさんうさぎの放し飼いの経験をもとに、新たな飼育のテーマは「いかにうさぎらしい生活を保障するか」であった。放してやるとそれぞれのテリトリーを主張するかのようになり、園庭の左と右へわかれてピョンピョンと走り、草を食べた。

ルンルンは私の手だけでなくミーミもなめてやっていたが、その光景は慈愛に満ちていてまるで母親が子どもをかわいがるといった雰囲気だった。ルンルンは小さな頃から決してビクビクすることなく気高く、私たちに対する信頼を感じさせる存在だった。その後多くの子どもの優しい母親になったが、なめることは彼女だけがもっていたコミュニケーションの手段であったように思う。

ルンルンとの心の通いあいを重ねるにつれ、私は言葉に頼らないかわりを大切に思うようになっていった。たとえば、泣いている子どもには「悲しいね」という気持ちで頭をなでる。心弾んでうれしそうにしている子どもには「よかったね!」という気持ちをこめて笑顔を返す、といったように……。

ルンルンとのコミュニケーションは、私の保育の質を変える「初めのいっぽ」であった。

(元幼稚園教諭)